ドトールにて

高橋さくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドトールにて

【Ｎコード】

Ｎ７０８６Ｅ

【作者名】

高橋さくら

【あらすじ】

ドトールのヘビーユーザーである筆者の体験を綴ったエッセイです。こんな経験皆さんもあるのでは？？

昼食は近くのコンビニやお弁当屋さんで買い求め、社内で食べる。
ドトールもお得意先の一つである。
ドトールは会社から徒歩一分の所にあり、週に1、2回くらいの割合でドトールには行く。週に1、2回だからそんなに頻繁に出入りしているわけでもないのだがなぜか店員に顔が割れてしまっている。

なぜ割れているとわかったか？
その理由はいたって簡単である。

1、顔を見るなり持ち帰りと聞かれもしないのに紙袋を用意される。
2、ドトールの商品、ジャーマンドックを注文すると大抵「ケチャップとマスタードはおつけしてよろしいですか？」と聞かれるのだが、私の場合「両方でよろしいですね？」と聞かれる。

お昼を共にする同僚Mちゃんは
「今度、純粋無垢な目をしながら両方ってなんですか？って聞いてやろうかなー。」などと言っていたがさすがにやめたらしい。

私達はふと思った。私達は彼等に常連の客と認識されているがその認識はどの程度なのであろうか？例えば別々に現われても彼等は私達を認識するのであろうか？と。

これはためさない手はないだろう、と私達は内心ワクワクしながらドトールに向かった。

先に私が中に入り、しばらくたってからMちゃんが中に入るよう計画し、計画はにぎにぎしく実行された。

……が、店に入った私は愕然とした。
いつもの店員じゃないっ！
そこには見たこともない女性店員が立っていた。
「店内でお召し上がりですか？」
女性店員はニコニコしながら尋ねた。
「いや…持ち帰りで…。」

……失敗。

かくして彼女に常連の客と認識させる為の長い道のりが始まろうとしていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7086e/

ドトールにて

2010年11月11日08時34分発行